

## 研究動向

### 国際コロキウム報告

小山宙丸

1994年11月17日(木) - 18日(金) および、1996年11月7日(木) - 8日(金) に早稲田大学国際会議場で早稲田大学主催、中世哲学会共催によって行なわれた二回の国際コロキウムは、多くの方々の参加を得て、無事終了することができた。計画の段階から数えるとすでに五年以上の時間を費やし二回の国際コロキウム開催にいたったのであるが、その開催準備においても、またコロキウムにおいても稲垣良典前会長、加藤信朗会長そして中世哲学会の会員の方々から多大のご協力をいただいた。そこで、このコロキウムの実行委員長を務めた筆者が、僭越ではあるが、この紙面をお借りして皆様に心から御礼を申し上げるとともに、簡単にその報告をすることをお許し願いたい。

#### I

まず第一回目の国際コロキウムは「中世哲学における自然概念」(Natur-Begriff in der mittelalterlichen Philosophie) というテーマのもとで開催された。第一回目の開催趣旨は、ヨーロッパ中世哲学における自然概念を、根本的に、そして同時に多様な視点から考察することを目的とした。それによって、われわれにとってなじみ深い自然概念としての近代のそれを、その出発点において再検討するための手掛とした。

コロキウムは四名の講演者を立て、それぞれ一時間の講演の後、特定質問者との質疑応答、出席者との質疑応答が二時間程行なわれた。講演はドイツ語、英語、日本語でなされ、会場には朗読された欧文原稿および邦訳がそれぞれ配布された。質疑応答の際に、司会を務められたのは福岡女学院大学教授(当時) 稲垣良典氏、聖心女子大学教授(当時) 加藤信朗氏、独 - 日の通訳の労をとられたのは早稲田大学教授クリストリーブ・雄峰・ヨープスト氏である。

次に、それぞれの講演者について極く簡単に紹介しておこう。現在七五歳になられ

るボン大学名誉教授クルクセン氏は、トマスの倫理学研究の権威であり、国際中世哲学会の会長も務められた。1973年にも来日され、ノートルダム清心女子大学において開催された中世哲学会において、公開講演「文化の出会いと受容——ラテン・ヨーロッパにおけるマイモニデスの歴史——」(『中世思想研究』XVI, pp. 1-12 所収) をされ、また幾つかの大学で講演をされたことを記憶している方も多いと思う。ホンネフェルダー氏は現在ボン大学教授で、ドゥンス・スコトゥスを中心とした中世哲学を主たる研究領域とされているとともに、現代の分析哲学をも考察の対象とされている。昨年も、スコトゥスに関する研究論文集 (*John Duns Scotus. Metaphysics and Ethics* Honnefelder, L., R. Wood and M. Dreyer eds. Brill 1996) を編集し、出版されたばかりである。また、ドイツ厚生省の倫理審議会の委員長も務め、EU における生命倫理分野での統一基準作成に参画しておられる。ルーヴェン大学のスティール教授は、今回の講演者の中では一番若く、古代末期から中世初期を研究対象とし、数カ国語を駆使してヨーロッパ各国で活躍しておられる。リーゼンフーバー氏についてはあらためて、ここで紹介するまでもなからう。

また、会員の渋谷克美氏(愛知教育大)のご配慮により、日本学術振興会の招聘プログラムで来日されていたオッカム研究の第一人者である M. アダムズ氏に特定質問者として参加していただいたことは望外のことであった。

四名の講演者、講演のテーマ、および特定質問者は以下の通りである(講演順)。

1. ルーヴェン大学教授 C. スティール (Prof. Dr. Carlos Steel)

「Scientia naturalis: 学の対象としての自然」(Scientia naturalis: Nature as object of science)

〔特定質問者〕 野町 啓(筑波大学) 福井文雅(早稲田大学)

2. 上智大学教授 K. リーゼンフーバー (Prof. Dr. Dr. Klaus Riesenhuber)

「被造物としての自然——教父時代および中世における創造論——」(Das Verständnis von Natur als Schöpfung in Patristik und Mittelalter)

〔特定質問者〕 長倉久子(南山大学) 峰島旭雄(早稲田大学)

3. ボン大学教授 L. ホンネフェルダー (Prof. Dr. Ludger Honnefelder)

「形而上学の対象としての自然」(Zum Begriff der Natur in der mittelalterlichen Metaphysik)

〔特定質問者〕 M. M. Adams (Yale Univ.) 小山宙丸(早稲田大学)

## 4. ボン大学名誉教授 W. クルクセン (Prof. DDr. Wolfgang Kluxen)

「倫理学の対象としての自然」(“Natur” in der Ethik des Mittelalters: *Lex naturae*)

〔特定質問者〕 岩田靖夫 (東北大学) 谷口龍男 (早稲田大学)

次に各講演の内容を簡単に紹介しておこう。

クルクセン氏の講演は、中世の自然概念を「自然の法」(*lex naturae*) という倫理学の観点から論じるものである。氏の最終的意図は、もちろん 13 世紀におけるトマス・アクィナスの自然法論を取り扱うことにあるが、そのために三つの方向づけが与えられる。その第一はトマスを自然法理論のスコラの創始者とする場合には、彼以前の時代が古代の自然法理論をいかに消化し、またそれをキリスト教的遺産としてもたらし、それがトマスにおいてどのように変えられているかを明らかにすること。第二は 13 世紀におけるトマスの思想の独自性を明らかにすること。第三に、ドゥッス・スコトゥスの自由に関する理解に見出されるように、トマスとは異なる自然法理解の発端がすでに 13 世紀に現れていることに留意することである。以上のような方向づけのもとに、今回の氏の講演は、プラトン、アリストテレス、ストア派そしてキケロという古代における自然法を概観した後、ストア・キケロ的法論とキリスト教的エトスの結合点を「ローマの信徒への手紙」二章十四節以下に見出し、そこからアウグスティヌスの自然法論を扱う。しかし、「恩恵の教師」であるアウグスティヌスにおいては自然法はその中心的主題とはなりえず、また救済的枠組みで展開されるキリスト教的な生き方に関する教説においては、自然法概念が重要な役割を演じることはない。学的な倫理学の構想の下に、自然法が位置づけられ、倫理的な観点で自然本性が中心的役割を演じるのは、まさしくトマスの「総合」においてである。氏はこの点に関する幾つかの道標を指摘し、さらに上述の第三の方向づけに簡単に触れることにより今回の講演を終える。トマスに関する本格的取扱は、後述するように、第二回コロキウムにおいてなされる。

ホンフェルダール氏の講演は、ギリシア哲学におけるプラトンとアリストテレスの自然概念を、キリスト教が「無からの創造」という自己のコンテクストにおいて受容し、結合することによって生じる自然概念の変容、すなわち自然の「自律化」(*Autonomisierung*) と「様相化」(*Modalisierung*) を明らかにするものである。まず、13 世紀のトマス・アクィナスを拠り所として、「被造物」としての自然、さらには自

然の「自律性」、自然と超自然ないし自然と恩恵の関係をめぐる問いを扱い、ついでアヴィケンナの受容によって生じる「本質」としての自然への問いを論じる。さらに、トマス、ガンのヘンリクス、ドゥッス・スコトゥスそしてオッカムを取り上げることにより、13世紀から14世紀に到る自然の「様相化」の成果、すなわち、全能の神の意志との関係で可能的なものの存在論的地位を問うことから生じる成果を明らかにする。ここで氏が、この世界は複数世界の中から偶然的に選択されたものだが、そうした世界の内部の可能性は同時に必然性でもあるというスコトゥスの思想が、自然の構造と法則への人間の探究にとって必要であり、またそれを可能にするという点を指摘されていることは興味深い。そして、最後に、現代における実用的自然概念のもたらす危機に対し、「それ自体において能動的な自然」というアリストテレス的自然概念のもつ意義を指摘し、この概念を今日の諸条件において再考し、取り戻すために中世におけるその変容に着目することの必要性を指摘している。

スティール氏の講演は、12世紀から14世紀までの中世の自然哲学がどこまで近代科学の自然へのアプローチの発展を準備したかを検討するものである。自然を象徴的コードによって思弁的に解釈する教父神学の伝統に対し、自然の原因と法則性を理性によって検証しようとする自然哲学の最初の試みを行なったのは、12世紀のシャルトル学派の人々である。ついで、イスラーム圏からのアリストテレスの導入により、13、14世紀には、アリストテレスをキリスト教的理解に組み入れる総合の作業と同時に、自然の哲学的・科学的理解と神学的理解を区別する方向が現れ、さらには、事物の定義から出発するアリストテレス的科学に対する批判も現れる。ここで氏は、13世紀末のフランドル出身の科学者・天文学者である Henry Bate of Machelen の“*Speculum divinatorum et quorundam naturalium*”を紹介する。彼はアリストテレスに対し、実在する個物、個々の事象についての知識を強調した。しかし、すべて個物に関する包括的学は不可能であるし、また彼の主張は自然に対する実験的接近につながるものでもなかった。14世紀には個体的存在論を強調するオッカムそして *via moderna* が現れるが、彼らの努力は命題とそれを構成する用語のメタリンギスティクな分析に向けられ、自然哲学を形成することはなかった。また数学的思考を重視したマートン学派の場合でも、それを自然に適用し、自然を数量化し法則を立てるといったガリレオ的思考とは無縁であった。しかし、そうした袋小路こそが、経験的アプローチによる科学成立の道を開くことになるのである。

リーゼンフーバー氏の講演については、氏の近著『中世哲学の源流』（創文社 1995 年）三八七—四三六頁に論文として収録されているので、是非そちらをお読みいただきたい。

以上、講演の概略だけを紹介した。古代、教父時代、そして14世紀にいたるまでの自然概念の変遷を、形而上学、倫理学、自然哲学という観点から解明し、中世の自然概念に関する包括的理解を与えてくれるすぐれた講演であったと思う。

特定質問者の方々には、予め各講演の原稿をお送りするはずであったが、原稿が開催直前に送られてきたため、ご迷惑をおかけした。にもかかわらず、的確な質問をご用意いただき、また参加者からも多くの質問がなされ、予定の三時間が短く感じられるほどであった。出席者数は両日とも七〇名前後であった。

## II

第二回目の国際コロキウムは、前回のコロキウムの成果を踏まえ、数回に渡るヨーロッパ側の参加者との打ち合わせの結果、テーマを「東西中世思想における自然理解」(Naturverständnis in der europäischen Philosophie des Mittelalters und der ostasiatischen Tradition) とし、さらに〈con-〉を接頭辞とする語群、すなわち Connaturalitas-Consonantia-Complicatio-Contractio-Continuitas (本性を共にすること、共鳴、包含、縮限、共統性) を副題として、東洋思想をも含む自然についての思想を扱うことになった。

今回は、前回のような講演・質疑応答という形式はとらず、セミナー形式をとった。提題者の選んだテキストは参加者が準備できるよう予め参加者に送付された。また、ドイツから J. Szaif (Philosophische Seminar B, Universität Bonn), Dr. A. Speer (Thomas-Institut), Dr. W. Goris (Universität Köln/Amsterdam) という若手の優秀な研究者三名が参加した。特にトマス研究所のシュペアー氏は、Die entdeckte Natur. Untersuchungen zu Begründungsversuchen einer 'scientia naturalis' im 12. Jahrhundert (Brill 1995) を出版したばかりで、注目すべき若手研究者の一人であろう。彼らも、以下の2, 4, 5のセミナーにおいてそれぞれ一五分程度の提題を行い、東西の研究者が共同で研究できるように計画した。

各セミナーの主催者、テーマ、使用したテキストは以下のとおりである。

1. ボン大学名誉教授 W. クルクセン

トマス・アクィナス：Connaturalitas-Naturteleologie und Norm.

Text: *Summa theologiae*: I-II 94, 2.

2. ボン大学教授 L. ホンネフェルダー

ヨハネス・ドゥッンス・スコトゥス：Consonantia-Rationalität und Norm.

Text: *Ordinatio*, III suppl. d. 37.

3. 早稲田大学教授 クリストリープ・雄峰・ヨープスト

仏教の自然および宇宙論：Continuitas.

Text: 『法句経』, ダライ・ラマ, *Aufbruch zu einem tieferen Verständnis von Geist, Mensch und Natur*, 空海『即身成仏義』

4. 上智大学教授 K. リーゼンフーバー

シャルトルのティエリ：Complicatio-Explicatio.

Text: *Commentum super Ebdomadas Boetii*, n. 21-34.

5. ルーヴァン大学教授 C. スティール

ニコラウス・クザヌス：Contractio.

Text: *De docta ignorantia*, II 4-7.

6. 早稲田大学教授 峰島旭雄

道元の自然観：Continuitas.

Text: 『正法眼蔵』第二九「山水経」

次にその内容であるが、今回は先に述べたように、セミナー形式をとり、共同でテキストを読むこと、討論することを主眼としたため、その経過すべてを報告することは困難である。そこで、各セミナーの主催者が当日配布したレジメと手もとのメモによって簡単にその内容を報告しておこう。

まず、クルクセン氏は、前回の講演が自然法概念を影響的に迎えることによって、トマス・アクィナスの位置を明らかにしたのに続いて、今回はトマスの自然法思想そのものを主題的に取り上げた。当日朗読されたペーパーのタイトルは、“Lex naturae: Die bleibende Bedeutung der thomistischen Lösung des ethischen Problem”である。ホンネフェルダー氏はスコトゥスの *Ordinatio*, III d. 37. suppl. を詳細に読み解くことによって、彼の自然法思想を明らかにし、トマスの *Connaturalitas* からスコトゥスの *Consonantia* への変容を明確に示した。リーゼンフーバー氏は、前回の講演が教父時代から一四世紀のエックハルトに到るまでの自然概念を

歴史的、包括的に取り上げるものであったのに対し、今回は、特に一二世紀のシャルトルのティエリの算術 (arithmetic) と形而上学に基づく創造論を取り上げ、規範的自然概念との関連で、この時代の創造・自然概念の諸特徴を明らかにした。スティール氏が取り上げたのはニコラウス・クザーヌスの *De docta ignorantia*, II 4-7. であるが、このテキストは、その解釈をめぐる H. ロンバッハと J. ホブキンスとの間で論争があったように、いささか難解な個所である。クザーヌスの思想においては“natura”という概念はそれほど重要ではなく、むしろ“univerusum”が彼の形而上学において主要な機能を果たしており、氏のセミナーも、上述のテキストを手掛かりとして、「縮限された最大のもの」(maximum contractum) としての宇宙概念を説明することに当てられた。ヨープスト氏、峰島氏のセミナーはいずれも仏教思想の観点からの自然概念に関するものであった。使用するテキストに欧米語の翻訳があるものという制限があったため、両氏ともテキスト選択の段階からご苦労されたことと察せられるが、来日した研究者との意見の交換も活発になされ、「東西中世思想における自然理解」という今回のテーマを満たすことができたと思う。

今回は、中世哲学会会員だけでなく、比較思想学会会員にも参加を呼びかけ、玉城康四郎氏のような老碩学も出席された。どのセミナーにも平均して五〇名前後の出席があり、活発な質疑応答がなされた。また、第一回目のコロキウムにおいても、第二回目のコロキウムにおいても、第一日目にはレセプション、第二日目には懇親会が行なわれ、そこでも、有意義な交流がなされたことと思う。

さらに、今回の国際コロキウムは、これに引き続き同じ会場で中世哲学会が開催されるよう設定し、計画の段階から中世哲学会にご協力をいただき、スティール氏には特別報告を、クルクセン氏にはシンポジウムでの提題の機会を設けていただいた。また、懇親会にも来日した研究者全員が出席し、日本の研究者との交流を深めることができたことと思う。中世哲学会のご配慮にあらためて感謝申し上げたい。

なお、この二回のコロキウムについては、現在、報告書を準備中である。またこの成果を踏まえて、ヨーロッパの研究者と日本の研究者の共同執筆による自然概念に関する論文集も準備中であるので、詳しい内容はそちらに譲ることとしたい。

最後に、日本と欧米の研究者が共同で研究を行なうことのできる機会がこれからも多く設けられ、実り豊かな成果を上げることを願って、この拙い報告を終わらせていただくことにする。